

7 8 9 80
1 2 3 4 5 6 7 8 9 90
1 2 3 4 5 6 7 8 9 100
1 2 3 4 5 6

中篇と集算荷



骨董集上編中之卷

○名古屋帶

一

江戸

醒と轉

外屋

外屋



文禄前後より寛永の比まで古画とよぶに絵と絹より繩と似たる
兩りふ絲とけたるといふもくまにて帶にもする体ゆゑて其色い
白あり紅白り青黄赤など或体にて彩色あるもあり按之是ゆる名古屋
帶あるべ一昔肥前の名古屋とく唐糸よりて組ゆゑ名古屋帶とも
又組帶ともいひと或人にて和名鈔

腰帶類云

縊帶和名加良織絲爲帶也

とあり加良久美の韓組と名古屋帶は此韓組帶の遺制小やあん又源氏
梅枝の巻云「だののやくもひも」とつて有へる所の巻物の紐をもつて
和名鈔服玩具云四聲字苑。緋青而黃也」シテ文禄前後比古画小青黃
赤かどいいろどりたる組帶あは是則綾代かくもは帶をさべき歟

一代男

天和二年 印本

二之卷 ふま「小幡山の名木落花らうせに今ひくわことうまく

一のよ男達其比ハ捕手居合しやうく出の風俗も糸鬚賀みくらうまげニすが
舞比舞上髪のく一て袖下九寸だ。染分の組帶。さうげの長脇指あくぞと
れり人太形は是王城小住人の有様今にくべ、昔と捨えどり北野又詣で
梅とらじ大谷ふ行てあとア折鳥部山の煙と五かくごの吸啜筒小者よ
アたん毛巾着ひるびるてうのである云。此一代男ハ西鶴の作たり此人ハ寛永十九年の生
比とてソリ此一代男ハ西鶴の作たり此人ハ寛永十九年の生
まれきなまじ代がくまくらへ證あくをまくまくする染分の組帶も紹乃か
くの帶のかくう歎當時に男だくたを組帶とひそびたるやわん 同書 五之卷
小筑前柳町の本とる處が組帶屋とく名目又えう當時に筑前ふくも組
帶と制トナリル○さて糸の名古屋帶い便利なうきゆ多ふ寛永以後いや
すれたらモ貞享より享保の比ノ草紙とし往くヨウマツる組帶。名古屋

五金産業袋

享保十七

年印本

卷之四 小云

名古屋織男女の革糸

うがく

うがく

女革ハ総つき

幅四寸二分

二寸五分

を

幅四寸二分の男革ハ幅二寸五分の女革とがくくふく只一枚ふかくもまかく名古
屋織とくば袋打かういづくも夏革から】とある古名のくわながら古制よたぐ
よ代知る所

○再按に竹齋物語

寛永中

の書

を

出たまくるをすくとあやひとぞ見えぬれどもやうく成め一上六乗ふれま
ちくお紫の小袖とあととまくは薄衣ひぢうの革ハ天下にいれむに二条通は百足屋
上人あね薄革とれまけ心とつくりてまんく此革の八つ打よ金もやばまくそくらる
云にマクの組革れどもやうくれ或上人の牡衣東のる条もとども兼承せまく管の
紫の小袖もとく成りてれりふ當時の女絆牡衣東にあざくらむ戲作がく一あくとども

今も——の僧丸帶とて式正のものとて——を糾組の常ハ僧家まで用ひ
なし。既に利休の像と画くに糾組の上着と道服の上み着と——
御伽婢子 宽文六年飄水子浅井 十二十三年の比と作りた
とて——考究され 御伽婢子 了意作元禄十一年刻 卷之二 『天正年中越前敦賀』 金銀や
かふ持つる商人一人丸男子とおどりありなり其隣ニ住有徳なる商人の娘と娶く妻
さまと(き約)とあるとそれも——にとく真紅比擊帶とその娘よもうりつぐいのあゆる
ゆきす。按よこれハ原剪燈新話の金鳳釵記と翻案——なつて物語なれども金鳳釵
真紅擊掌につくつて天正年中也——たゞ當時此掌とりて用ひて事寛文乃
比とぞいひつてへたゆゑかくへなれど一端に傳す

○火鍊 日

火鍊と云ふは近古にてなるものなり火鍊のたれ以前ハ物に尻かけて火鉢と足を燐
たまく 古き繪卷よ其体とえげとありあづくに首かれ左み摹出せり

下学集

安火鍊比名目又之

尺素往来

小竹爐生炭才床に付て候風雪を追ひて

て火鍊のことを云ふ也

清俗紀聞

よ冬ハ手炉と用ひ極寒中ハ足手足冷る時に脚炉よ

火と入て灰と覆ひ椅子の前或は睡床の前よ坐て足と其上ふ坐て温る云。地炉
石炉と云ふ此方の巨焼の様よ地よ炉と拵て坐りありこれハ南方温暖化土地よ

用ひど

行厨集

煖手者曰手炉 煖足者曰足炉 清俗紀聞ひづ脚

炉ハ是なるべし ○ 或ハ按よ火鍊ハ地火炉の如くナシん歟地火炉ハ宇治拾遺
又云す。又 奥州後三年記 ふ永保の比陸奥本地火炉つて。どうゆうわじと成記され
いづかたまの此地火炉ヒ制りて火炉とたる至大炉又いかに様をつくり出くを
やづらひがすかと櫓と名づけられたりを戰国の時代制すや人甚居れ
櫓形に似たるゆゑ名すへりふ

○名古屋帶古圖

按之れ寛永以前の
古画なり當時兒童女ハ
マツメ如きまつ髪れハ
ウタボ松とく
名う



○衣服ハ縫落とて
紫革の足袋とて終り
二百年前の古風

眼前より如

○此時代の繪と曰ふるに
婦女の衣服ひよて著るを廣く
りしるゝあるべし
さうのうもそれひととくゆゑあや
威儀のたゞかり一派ありテ

○寛永二年印本

絵本

富る者より或ひる者
冬へ是火よするをな
服の蒲団と打けて
すとくそす

○又寛永より明暦の
比の能譜の今本

詩火爐とそよとせかり
せひれ猿とまつづけ
かう櫓の号ひでまく
かうん



調花堂藏

○文明以前火爐

多見時代火鉢と
足と仰みしり体へ
窓ぬくとくのふ

火爐とそよとせかり

せひれ猿とまつづけ

かう櫓の号ひでまく

かうん

○かどやき もがく

三

鰻籠は檻焼ハ其焼たる色紅黒からく檻は皮小似たるゆゑ名なりと諸書より
ハ不替の説たり 猿樂記 み香疾大根とひて名取るをあらへかう櫓の香乃疾く
他比臯ふ入比謂なまづけを鰻籠は香疾へよく相當ある名かり鰻籠と焼子也

書方
字多
年高
年高
數多
書多

却もよりるや諸書と参考する文安下学集五 箱挑燈行燈挑燈とゆべゆでりこども
籠挑燈下學集ハ 文安元年此書から
寶德七十一番職人歌合 ふなら君よりる男續松を持
當時も挑燈と用ひゆまれり行燈 宝德
籠倉年中行事 管領のりくへ漢參の
行列のみとす條 「續松二丁行燈一札」 からりて挑燈れこくうけを當
當時もひらひらひざりー 康正 長祿 寛正 文正 慶仁 文明 尺素往来
挑燈の名目とえまし文明以前ハ用ひゆまれり天文 頭屋節用 長亨 延徳 明徳 文龜 饪
或古記大永三年の条「門よちやうらん二ツかく」 からりて恩びやふ出
天文 穴太記 天文十九年れ条 中間よ挑燈ととまとどそそくそそくそそくそそくそそくそそくそそく
手すりこれへ葬送北条五代記 片山本寛 天文年中挑燈の
指物と用ひゆみの外をす 弘治 永祿 土山本寛 当時ハ既よ挑燈よりらまゆねりくわづりー や
甲陽軍鑑 卷之一永祿元年れ令より不斷不可燃挑燈 からりて文卷之十下。永祿六年

骨董上　第二
の余軍用乃と成り所よ下荷駄馬一疋よ挑燈二つとしづけ結付馬負へと又
かつけ續松りとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
元徳 天正 或古説ふ。永祿天正の比好古日録 箱挑燈へーの時始て制す上下と藤葛を以
編たり板と用ひ慶長以後此事と云天正已前れ挑燈ハ籠よ紙を粘りて用ひ醒ヒ云
在ふあくと古此説より古説と合せ考せばたゞ挑燈ハ天正以後此物かべー 元和
寛永 正保 褒美 吾吟我集未得著 箱がぬくらびきなり比挑燈よ身どうでけほらひく
とく狂歌あれど既よ當時カづきと挑燈よ身もかのり承應 明暦
草紙に繪成りて身と竹把さと丸き挑燈とつけより今高挑燈れたゞひく
手挑燈ハノシトモ如一 宽鳥記 宽文七年印本の繪ふ棒ハ劍と箱挑燈あり 俳諧夜錦集
挑燈ハノミタモ如一 宽鳥記 年印本の繪ふ棒ハ劍と箱挑燈あり 宽文四年乾坤乃
箱挑燈うちれと保文 ゆるふれと當時箱挑燈をとぞと用ひゆゑ金

延宝

延宝六年板

斐川繪本

箱挑灯

柄と引ひたるものあり當時よりもつれと用ひたり

隱蓑

延宝五年印本

附合れる

「拂りひの煙すそろ挑灯」

と見えられ當時に爐中挑灯

もあらかじめよて當時高挑灯みく丸を用ひてとてある

提灯

もあらかじめよて當時高挑灯みく丸を用ひてとてある

但神事葬送やどひく丸を用ひてとてある

天和

貞享元年

當時印本草紙の繪と参考する延宝より元禄比

本れ草紙の繪と参考する延宝より元禄比

天和

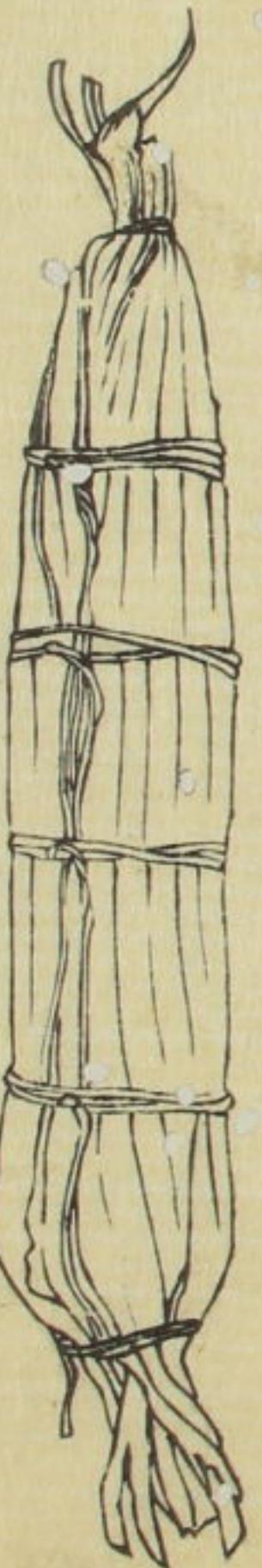
貞享元年

當時印本草紙の繪と参考する延宝より元禄比

不警説

羽州松脂蠟燭圖

長曲尺八寸五分余

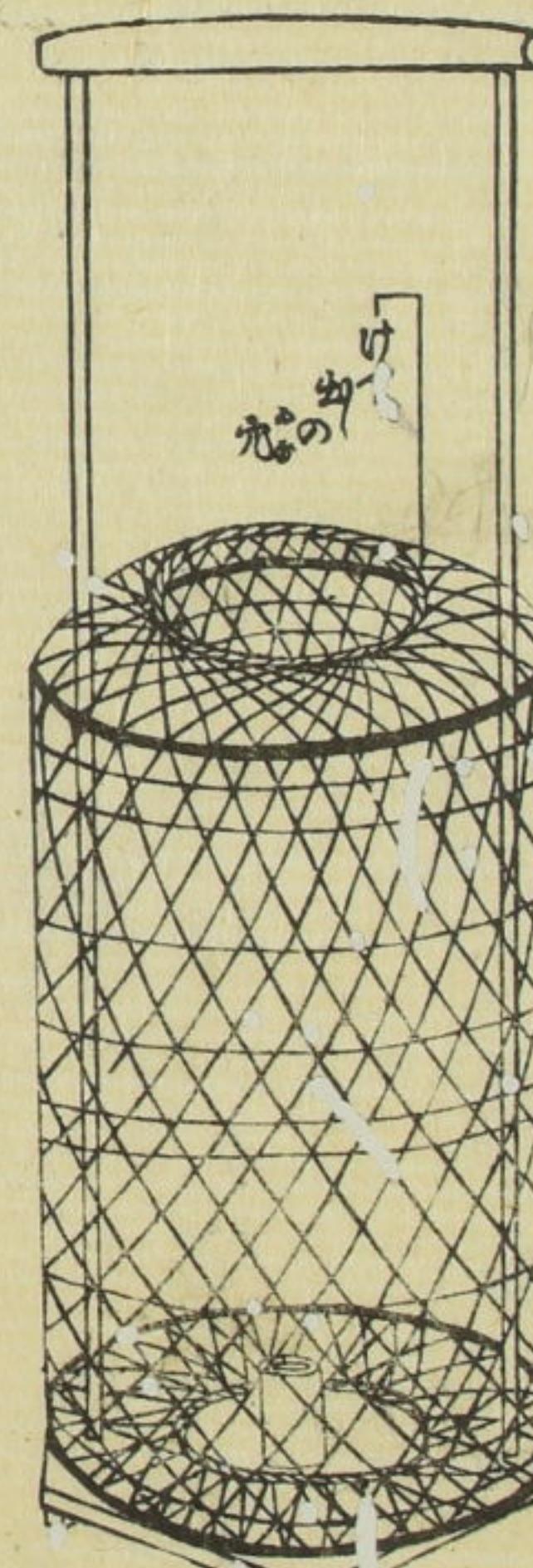


毎葉に松脂とて
蠟燭乃づく
御子屋松脂燭の竹
筒にて火とて

長曲尺八寸五分余

○羽列籠挑燈圖

羽列はり今後家用ゆこれ
天正以前の挑灯也古製とある
此物うち形の異同大小
うべあつは取得する
ものと雪の道に載る
り成臨ひどりか
古制表記今見
のものノノリ



角六板臺

○總高曲尺二尺余
籠高一尺二寸余
表紙と糊で
表紙と糊で

○籠に上へあけ入火とどもと
やうにつく基盤せ板又竹せ筒と
立て右の松やよらうそくと
えす料とん

雪川ゆきがわ
羽列の御家代
さゆどりの糸に雪川附てにつけ
ありとひを拂ひぐもとむる事無
見あらわせ城多分くらうくらうじ
大路おおじとがまへこし一火を。あらかじめ
極きわむわすよ木とふらだくらうううう
それふすよやうる模もにつくをそく。
かけありくたまりと。
れいととしを送り
紙しきとありてありくたま
あり。

○寛文七年印本
水鳥記

所載

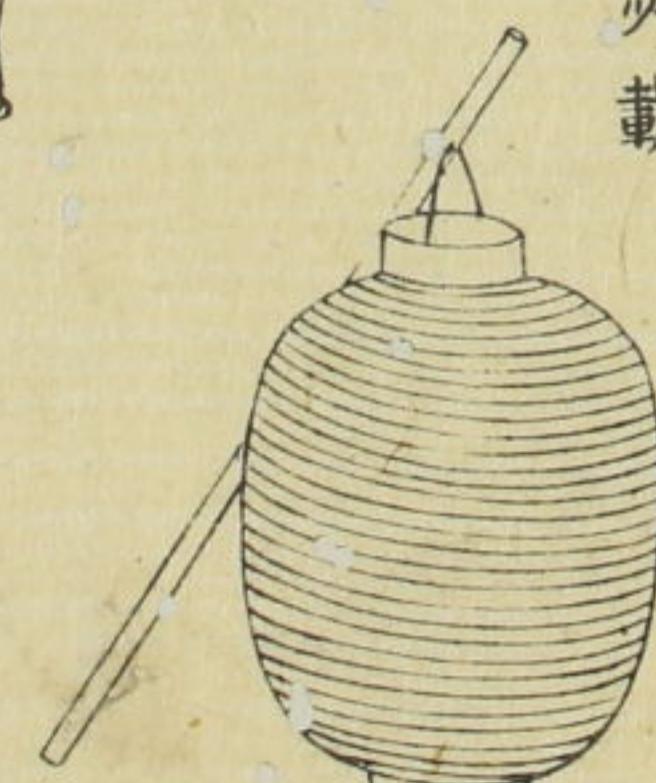


○元禄五年印本
胸筭用所載



○寛文六年印本
訓蒙圖彙

所載



○元禄十五年印本
諸藝大平記

此番あり
當時あらへ如く
棒ぼうとくこと
箱ばことくこと
製作別々



○元禄八年
姿繪百人一首

所載



西鶴大盤
貞享四年板
卷之二
火名見題

○元禄八年

姿繪百人一首

所載

○万治四年印本

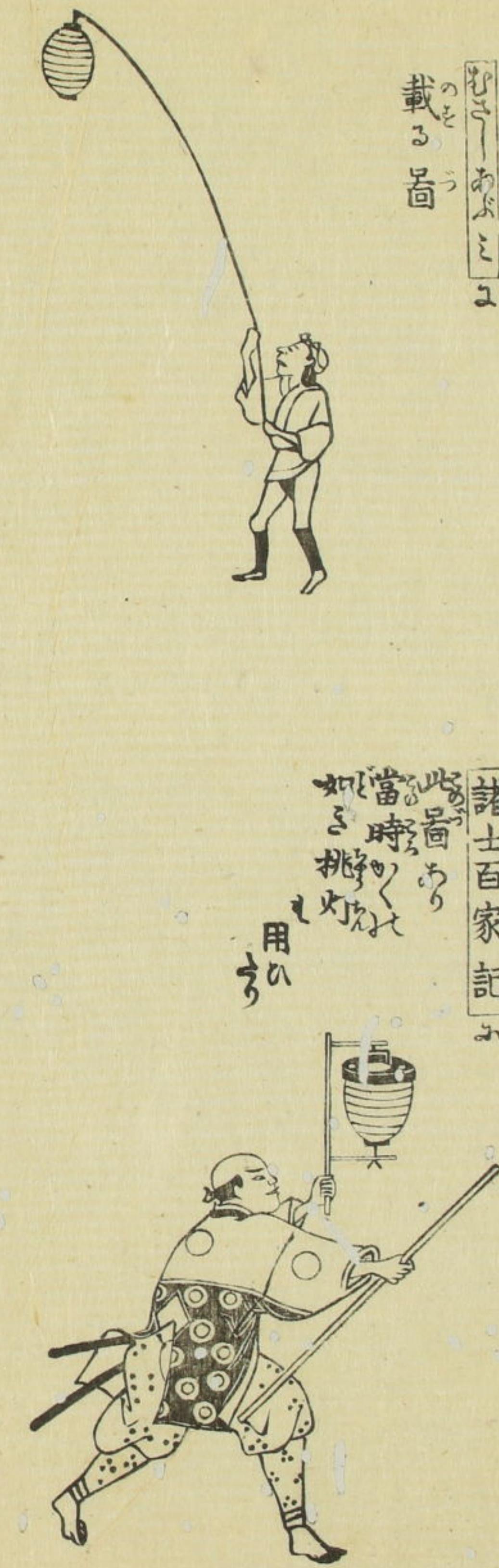
載る旨

○宝永五年印本

諸士百家記

當時の如き

如き桃燈も用ひ



○行燈

行燈は始詳やく下学集

安燈

篭行燈挑燈

やかべ出一

鎌倉年中行事

行列は續

松行燈と持てけるとよそを按る行燈は元家内と多量物にゆえに檜松へ便利

まゆゑふ灯火はいかへて風とあせた持てりく爲に造りたるものか

然則字義空

りて民家へ端近く風とあひてゆゑに灯火ふしおりて便りれを後ふ燈籠ふしおりて
用ひたるやう人。そて永正御撰何曾

のうちに法僧は寮より物事手れきてありとくとを

行灯と解何曾ゆう傳僧の寮より物りそれとてんとんとよが古言多し

下学集小行燈とつがばつけた後ふ上木ある時乃ちまよべ一貞徳乃御拿

ゆき行燈とつがばつけた

玄峰集

佐見鑑本町炬松もく壁かど沙もゆ

行燈であるとて月面

嵐雪

くくれと鐘木町かくは續松と用ひ元禄れは行燈とぞかくしむとあべ
翁草巻れ五よ云古老の物語よ今に世にゆる調なづくう皆ある事はやれども
かくわくは行燈をとくよりあれと今に如く蜘蛛と中よ約ハ近きゆなり昔も路次
行燈れ如く底板み灯臺と蓋たる底遠州とす丸行燈とぞかくそれより角を行燈にし灯
臺と中に約ゆ始もり此説比如く行燈は古製ハ今茶人の用る廬地行燈とよ

物と見て知るべ其製作わ歩くみ便りそれを元家内と云ふ造出一
もれよへるさへ一 運生八牋 ふ有柄曰行燈用以秉燭と曰う唐土行燈此方乃
桃灯ヒヨウひゆう

元禄二年印本

本朝櫻陰比事
附載圖

當時近き行燈とあくまへん如き
行燈と日ひのち今見諸國は行燈と称行燈
用ひてあり行燈を二十四五年前かの是
上野の旅行でより一の宮北邊を移行
行燈と用ひて次より京都までとんじゆ
これと並びて船につくもあつとまね



○笠比下ふ布と垂
六

○今茶人用
處地紗燈と云
名これ又似る

秋齋間語

宝曆三
年印本

卷之二小亨禄二年比古画と載す左比如何
今案した主人比女も

被衣やされぬふ市女笠と足すりそばづひの女下女へ手ぬぐひのくじ
布と頭にいのちふ笠とあすなり職人歌合の女ひ頭ぬぐく布へ別立

秋齋間語
所載亨禄
二年古画

一向ノ下女ノテイ
ナルヘシ袋ラモタ
スルハ古風ノフベ



主人ノテイ 今去
カツキテイノモノヲ
タルカウニキタルハ大
ウチキノテイトニヘタリ
市女笠ハカミソコ
サルタメカ

亨禄二年と今
文化十年より
やを二百八十五
年比女當時
の女ひ頭体とく
かう此畠密画
よらざれど甚
あらじと
アラシベ

○寛永時代古画

此圖と載り

代筆一絵は
古畫と

刀子
下



○詞花堂藏本
天和四年印本
斐川の繪
此圖あり

○本花園藏本
寛文二年印本
要石
所載



京山模寫



○詞花堂藏本
天和四年印本
斐川の繪
此圖あり

○本花園藏本
寛文二年印本
要石
所載

○これも先古圖と参考する
寛永寛文天和時代まで
の衣冠と布とを示す
老女は寒毛とを示す
此乃遺風す
老女は面とを示す
卷之女は面とを示す
被り物
笠
扇
手鏡
扇
手鏡
扇
手鏡

○此圖は傳
かとせらるる
婦女編笠塗笠に
就て也。此圖は
婦女編笠塗笠と
サクレヘト吉田と
さり古き繪卷を
とんびく見まう近世
女い面とゆきんと
駆け道と行ふ汝に笠と
戴る又へ覆面なつてう
賤れ女も
面とゆきん歩行へられかり寛文比まで女は
編笠塗笠とゆくて少くとも
面とゆきん歩行へられかり。寛文二年の印本
江戸名所記 かどの繪と見ても考へむに
あらう。其後後藤と云ふ面とつまつて宝永比まであらかりと
女子出門必擁蔽其画ともすみのづくりと

○女の編笠塗笠
七
婦女は編笠塗笠とサクレヘト吉田と
さり古き繪卷を
とんびく見まう近世
女い面とゆきんと
駆け道と行ふ汝に笠と
戴る又へ覆面なつてう
賤れ女も
面とゆきん歩行へられかり寛文比まで女は
編笠塗笠とゆくて少くとも
面とゆきん歩行へられかり。寛文二年の印本
江戸名所記 かどの繪と見ても考へむに
あらう。其後後藤と云ふ面とつまつて宝永比まであらかりと
女子出門必擁蔽其画ともすみのづくりと

○毛吹草 線舟撰 正保四年刻

花笠とゆきん笠とゆきんのづくりと

元弘

○観山集 慶安四年 令徳撰 明暦二年刻
紫乃霞画 トトロ絵とよぐ

良保

按るにいはるハ紫乃霞とぞと
おひそれと下にちる

幕次く 延宝六年刻

附合の句

かくわんなり笠志ぐれ乃秋

松意

拂まふる事無くはすと改め
拂まふる事無くはすと改め

二代男

貞享元年印本卷之五云「四十七八年、嘆がとむらくる露草色比布子にむりぬを

笠かくわんなりせこりれ供と付てうすに錦帽子よ寺社礼扇と持てく」と見えし所

貞享元年比より塗笠へやもとれる故

安用訓蒙箇彌

元禄元年印本卷之四

「人れ心のいろ拂き

三けりの衣紋伊達姿真壁比笠やく一帯追風ゆうに芳くわたりとれ京都女郎
えくかくわん元禄れくじや笠としもくゆくわたりたましと

其袋

嵐雪撰元禄三年刻

笠や男若弱たる花乃山

百里

當時ハ男比笠やくたゞ似令へうさり一故俗はれく

元禄八年印本

「甲にふきむ

女れもと今に兵庫曲おうげは浅黄みうそん裏に下足云くは革足袋よりえぎの纏を

つけねり笠かくわんとそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりて

骨董上編中土

當時ハ塗笠紫足袋共ふとく古風みあしとせがゆ 同書 お水口れハ兵衛ざく木地

だくら笠に千とぢくの紙紐と付て大當世極みどり○ 安永乃比昔ふうてほしと

作譜日本國 元禄十六年印本

螺

附合の句

丸錦よ塗笠まくるきくと駄

友重

星等も當時塗笠れおもろする一證也 松の葉

元禄十五年印本

お水口れハ兵衛ざく木地

七種人そひのとけ笠ふつておも年れさ。ゆくれ笠るいよこの。さくま。かくわんと

きくわんとそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりてそりて

花見車

元禄十五年印本

朱拙

和漢三才圖會

塗笠 用薄片板紙張之漆黒色出於京師延喜坡

同書 越前國

トサノ部塗笠 戸出於我衣 古老比ね泥と圓す一なふ云 小兒比塗笠ハ小ぢりゆて内よ菊
土産之部塗笠 戸出於我衣 古老比ね泥と圓す一なふ云 小兒比塗笠ハ小ぢりゆて内よ菊
牡丹梅椿水仙桔梗燕子花等と画たり 紅白と紙紐と引通して縫ふ

○寛文二年印本

江戸名所記

石かまくら

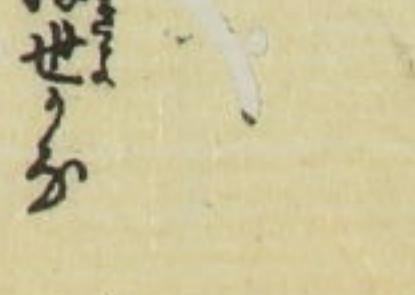
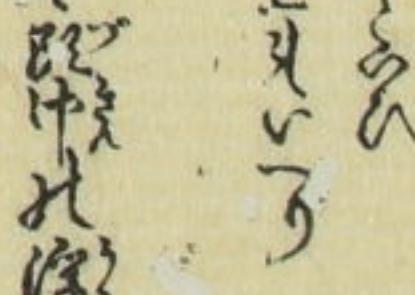
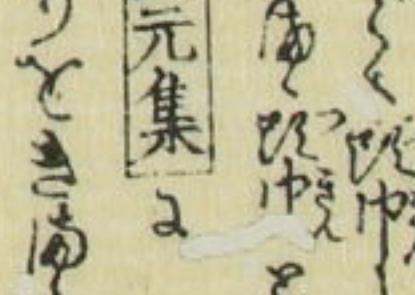
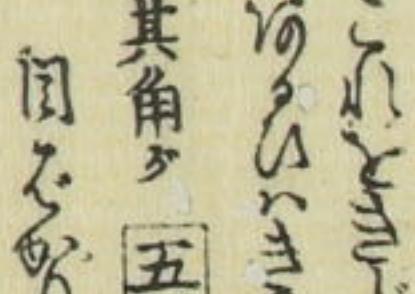
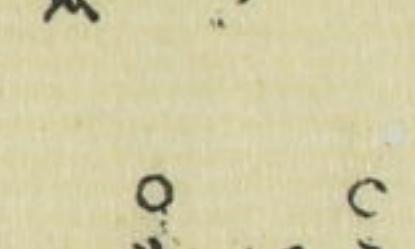
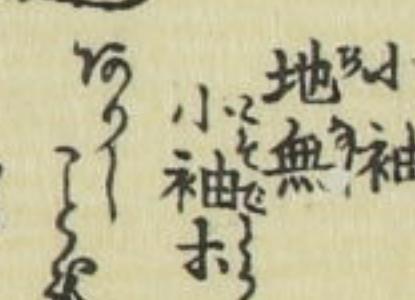
よみぢ

貞享の時の
繪と此の圖

孔雀樓筆記



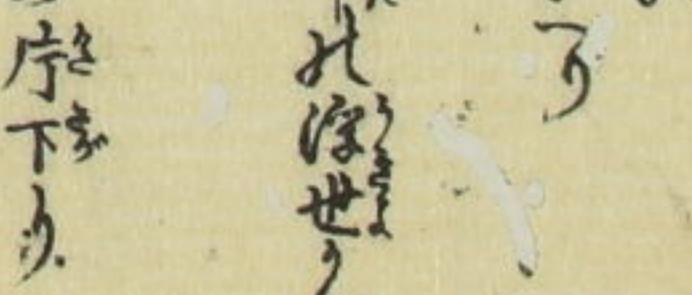
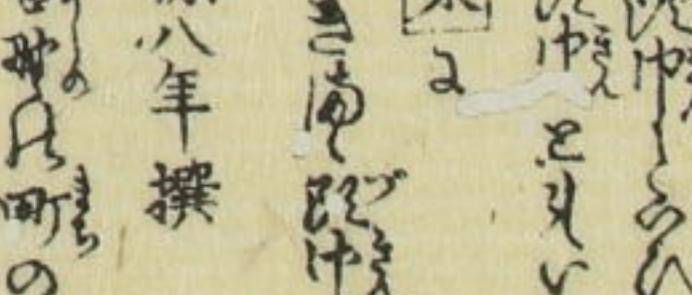
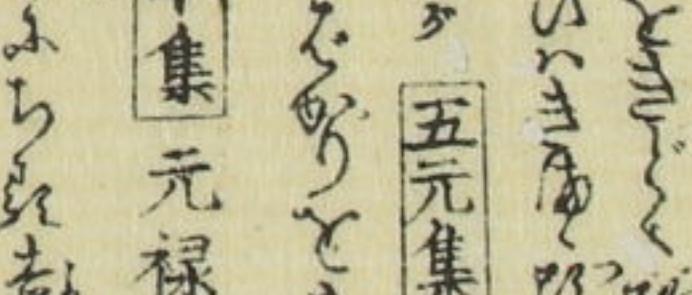
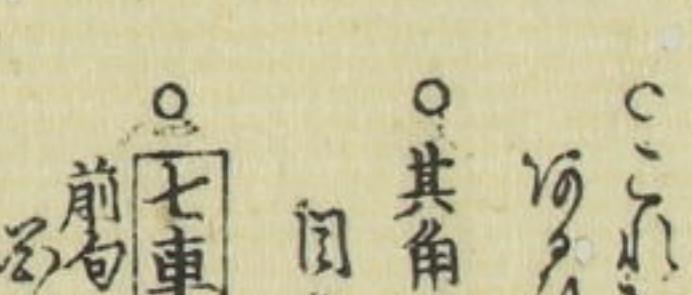
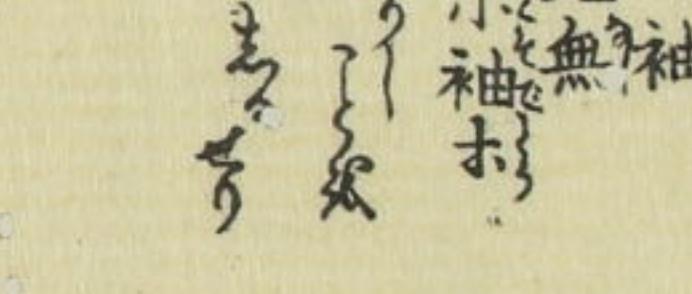
同書



キ角

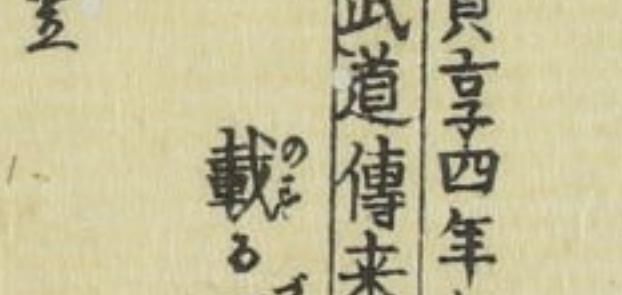
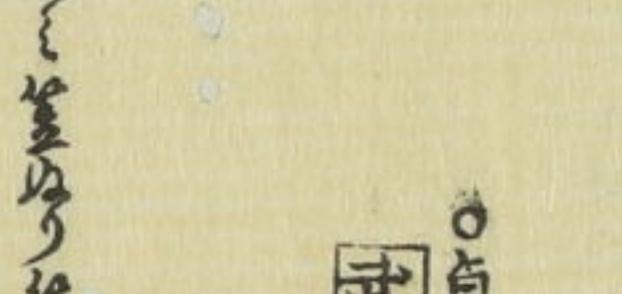
當時へ
塗笠
偏笠
笠ともよ
ゆめこじら巻
をくわせたことそ
昔れ禮儀なり

所載



キ角

○反故堂不舊延宝時代
離れ小屏風



キ角

○天和四年印本
斐川師宣

當時



所載

物類称呼
綿帽子
にやうてかき
といひの塊よそ
こもん縫とひ肥後そ
てがそとひへ腰革ヒトヨリ
より。醒こ云これ製作れ形
るる名から。又何る物よ
斐川比翁がどん少女人
紫れわらうすきる体と多く
えがけの毛あらべ一されど
後にもかくべだれども
すまたとみて手細い
人かき金へ腰革と手細いのも
またと見て謂から。とまほ紀本と細本と
りふくらひかた金

大和名所鑑



所載

天和貞享
元禄比翁女比翁
寛文延宝比翁
當時山あひ笠
少女ニ斐川比翁よほまの刀をさうゆ多ふれ
小女郎手もひて男子もくさりス一文字と
ソシム形ヨリレル名こまくさうにふるは
白はるをもるやうにふるはてば偏笠

人やうて然合笠とこそありとひふ
見そり又偏笠比翁細密なると目被と
松ひふくら。伊勢偏笠人

和漢三才図會

これハ男子比翁



所載

○元禄二年印本
本朝櫻院比事

所載

元禄半ぬり笠とて火
かげで免もひ笠と
つ文づく花女
きく巾とがわうたる体

身



キ角

○桔梗笠

八

天子草 寛永十年刻

毛次草 正保四年刻

玉海集 明暦二年刻

口草似草 明暦二年刻

物忘草 花明暦三年刻

歌謡集 時花明暦五年撰

蝶子草 帰花明暦六年撰

徳元吉政喜雅

作者不知

右此如くかと能詣れ句集ニ桔梗笠と云ふがもわられど當時もくわられずの笠也。

山井

慶安元年刻 著作堂藏本 ふも

桔梗笠

著

花

花

花

桔梗笠

貞享の比の繪此箇

大神樂打の

体

桔梗笠古圖



貞享の比の繪此箇

大神樂打の

体

元禄の繪此箇



此二人
美少年乃
弟子の体

大神樂打の
少年の体



天和貞享の比の繪此箇
うらふ此箇と載たり笠へ青黄赤

間もまんいろどり

○ 浮世袋再考

沙金袋

山本西武撰
明暦万治比刻

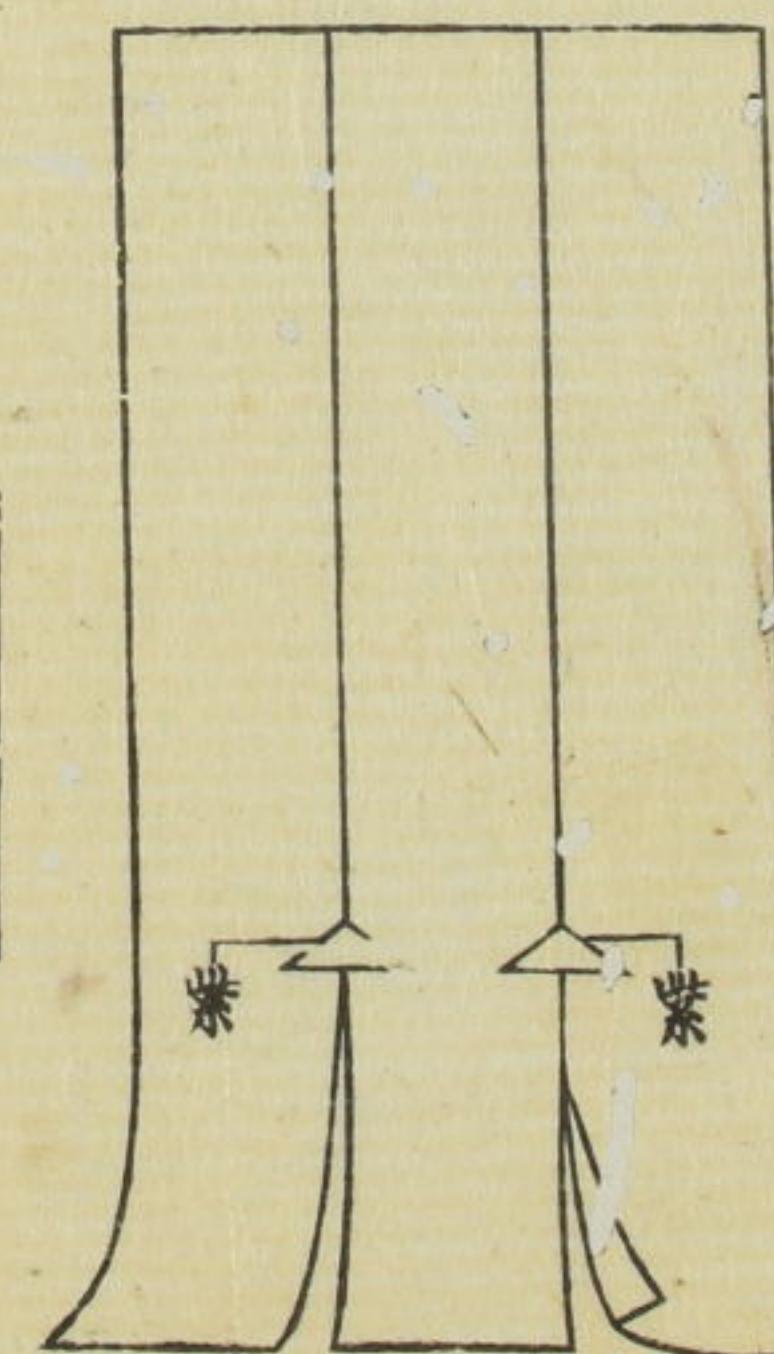
九

底たく浮世袋や年ノモノ

要西

此句とりてかく考るに浮世袋の勝れなくなり。〔秋齋間語〕云々「昔太刀又つけし火打袋と三角又縫やゑ紙子又火打の名ゆ」此説ふれど三ノ角又縫する火打袋も何れも浮世袋なり三角又縫する火打袋は遺失して浮世ぐるを輩出しこともうがむすゆゑ名づけたり。〔卯子酒〕宝永六年著卷之三。昔九軒町の繁昌一なる事ある。余が浮世中若とす物とせびる。とまく。これも浮世袋と同物と後みあき称一なり。

○指拾女郎の布袋。浮世袋とつねりとらへ。此考れどくのまんれ縫め紙子又三角形をねとつけたが浮世袋形と似てゆゑ。ももこのうへ。右画より如このまこと焉不休。堺北詔ちまた浮世袋のすゝれ繪図。草とけりえ



骨董上編中十四

〔本朝俗諺志〕延享四年印本卷之二云「今傾城町は暖簾ふ等乳と乳と乳守れ外ふ。」
○又童女計業ヤナカハトアシテ。ねひてひとうそびのとくらべて粟乃れ御多聞。三ノ角のものを
さき世アラシ不も其形ナ似れをやべり。

○又拾女みたり。浮世争ひ。慶安明暦元禄れ比もでもあり。〔吾吟我集〕
慶安二年序代文云「ぬき人代よ。衣著てうたをうひれ小並どれどり。雪舟也おびもアリ。未得著。」
如云々」といふ。

新續大筑波

七夕 しまむら 舞妓へうきせぐひのふ

正信

能諧糸屑

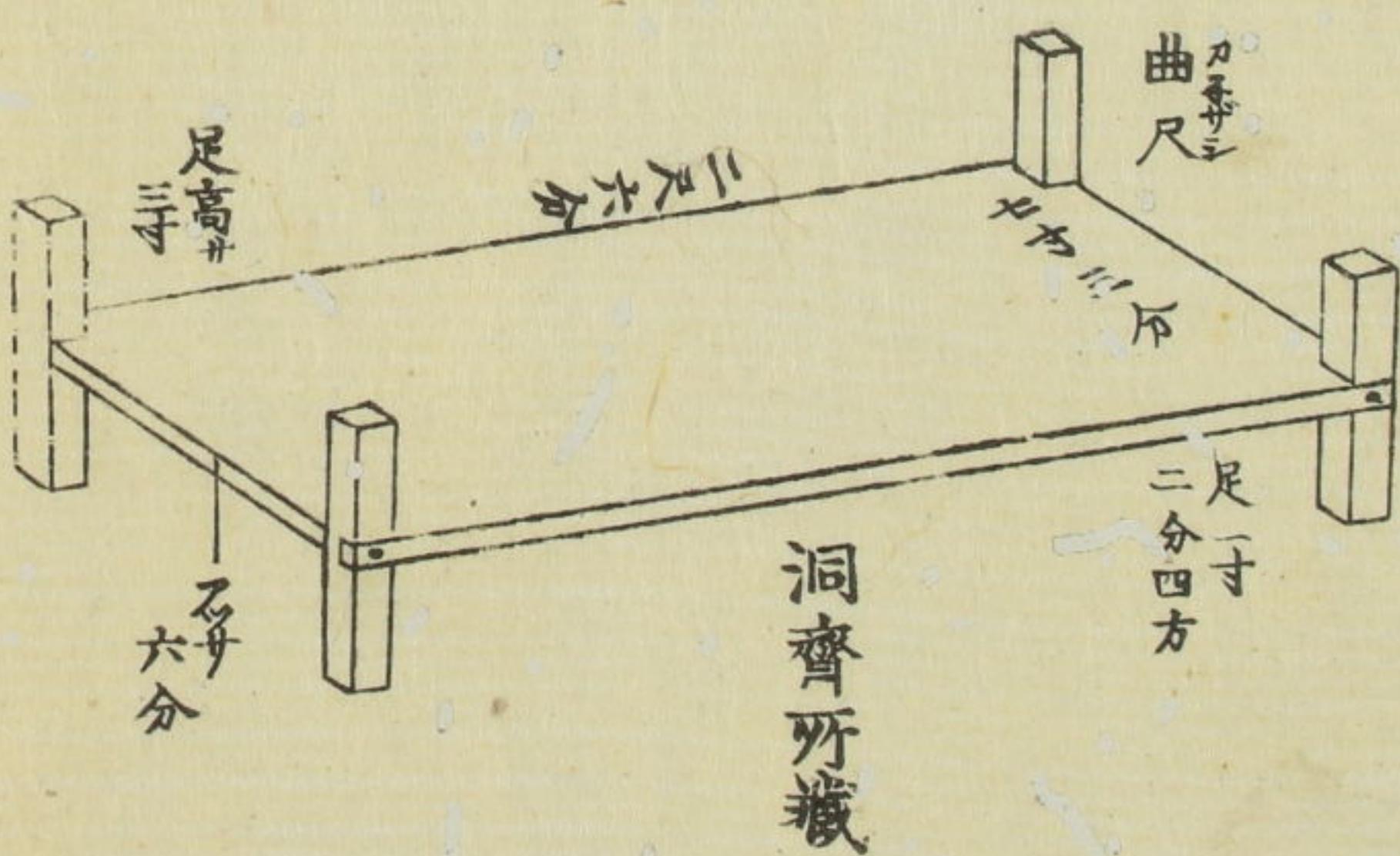
元禄七年印本 疎之部下「浮世袋。浮世名」と云ふ名目と必ず題字とりて記して

す。案るみ昔いとて當世様とみて浮世とぞ。一々それも古事より能比狂言の
きへトじこといふ舅のいへる言ふ「やんくよ。や婚とみへうなよ人やにうて云々」と云ふ。而も
これ當世人と云ふ如。岩佐氏と浮世又兵衛と云ひ。當世様の人物と画きゆるや
う。又案るふ貞享の比かけ。物乃本。浮世笠あり。〔雍州府志〕元頃年ふ。浮世陽産ゆ。

江戸室町の横町と浮世小路とひしも昔浮世籠 浮世夢庵がどうなりふるかとあつて
書かれてば、今も其たぐひれ商人がねどき

文 湖時代の酒食論より画巻又鏡水
時代れ繪は此裏板とそぞうこれ式正れ
りふへ向くもくじりとも裏板の一種乃
古御より下りて今も京都れ舊家より
まれよりて好事の人文臺などして
わがもよりて又甲州民家より今も
これと用ひて表うて裏板とばかり裏
裏板と云ふ便利にたりのござまく

○裏板の古制トシ十



○大津繪の佛像トシ十一

元禄四年芭蕉栗津の無名庵より一時正月四日か

大津繪比筆の如きは何佛

口をもたらすてやうよ古の仏像と画くとちよととあつて當時の大津繪比仏
持仏ふ掛る者れりくらりゆゑみれのうかし仏繪れりおこかつ戯画ひきづ
なきあづべされどこそ當時左れどく絵句と色りられ

俳諧日本國

元禄十六年印本

杏花園藏本

本朝諸士百家記

前々附夕遊分れ繪後妻と相付せ

吉林

前々不知

大津絵

廻面にて身鉢たまき

一雕

ル裏店は嵐閣といへる七十有余れ老法師なり中畠方半ばかりは棚とぬて大津

繪の三事とかけ一首の讚タメ

絵ふやも本にまざるも浮院の浮院未來れどもか別くすま



一枚の紙ふ上下。中一文字風帶。此形と彩色は
あきれて掛軸よりもゆきのゆき

芝峯軒所藏

井川家蔵

○又五ヶ大津の草紙

刻板年号詳
案ふ天和貞享比
押絵をもじ花をけく有財氣り人形板木押の弘法太師巣鴨嫁入縫金園

大東の多門店を東門が連奴これか大津追分すてゝものぞり刀立れ都か
やくくよ云くやくも天和比ハ戯子繪ともりまつあらぐ

○又享保十一年竹田出雲作セ伊勢平氏年々鑑より淨瑠璃大津繪の十三
佛とソシモモとえてそれを宝永の比もぞもかの仙繪と用ひ享保れ比もぞも委ニ
ヤリものかくらど今へと見て見るかーたまく或人比おもとみ摸へく左又右へせ
但今も太津お仏繪かたふへゆるも昔れもゆくたゞり

○因ふ云一代男

天和二年印本 詞北堂藏本

卷之三ふ寺泊比傀儡の家はまとひて条よ「牛風乃

枕屏風追分繪は奴ヶ蟲の余と君ふくらべて赤ん丹してきり、不役見てき」とあ

る

○又大津繪佛像縮圖

刻板年号詳
案ふ天和貞享比
押絵をもじ花をけく有財氣り人形板木押の弘法太師巣鴨嫁入縫金園

大東の多門店を東門が連奴これか大津追分すてゝものぞり刀立れ都か
やくくよ云くやくも天和比ハ戯子繪ともりまつあらぐ

○又五ヶ大津の草紙

頭と兩手は木ふりて印外の筆者
大津繪佛像縮圖
總長曲尺一尺七寸
廣七寸五分強
丹蓮華ある。

○又五ヶ大津の草紙

頭と兩手は木ふりて印外の筆者
大津繪佛像縮圖
總長曲尺一尺七寸
廣七寸五分強
丹蓮華ある。

同三尊來迎佛

ころも黄土。輪後光。蓮華丹綠音。
雲朱墨。寸尺かじ林前よおかト。

尚志堂藏



諸士百家記より見る第
狂歌セ三号也も此より多く

同音
瑞祥

元禄三年印本

東海道分間繪圖所載

(大谷)此處小佛繪り有と

芭蕉は大津繪れ向

元禄四年此處をこれとす

一年三月の板行ゆる當時の

ももく月日をふううべて

ももくふゆく一

奥書ニ云

作者遠近道印亞

繪師夏川吉兵衛

元禄參年庚孟春吉旦



京山抄寫

園宮

○淺葱椀 十二

昔淺葱椀より物たり木之双紙

慶安二年印本

卷之上に青玉細花器と云ふ

代繪の所打たれたりと云ふ。而まきにて云ふと慶安乃に既に物を

雍列府志

貞享元年上梓

土産門

二條の南北新町所

製織椀

と云ふ。黒漆比上品

色并ふ赤白の漆と以て花鳥と彌云。原書漢文
貞享元年印本 卷之四ふ富ふ老の事と云ふ。京や自然とあまく物の静なる向ひ
海下敷二百人前の浅黄椀三町をう牡丹畠と云ふ。我らは自由の花車と云
てなりき。鼻も人か牛を狀も夢見く居てそと云ふ。りくつもとて浅黄椀へ下品乃器ふ
向ふぞうべ。俳諧糸屑 元禄七年印本 も浅黄椀と云ふ。當時もくふ用ひる。蓋ふべ

晋子十七回

享保八年刻 淀著

前々子ふんべーとたのむまで生

隼秋

附名ふも似ぞ好きとぞ出れ浅黄椀

雪点

骨董上編 中十八

御伽名題紙衣

元文三年印本 卷之二ふ浅黄椀と云ふ。ハシモト元文の比までもうす。もの

今ハシモト名づみ聞えだきぬるのと云ふ。昔りう形にする歴に今もくしてうれもの
いとおや一

○重箱硯蓋 甲三

或書ふ重箱へ慶長年中重ひ食籠よりこづて始て製造しと云ふ。うけ
サ。今按うれ重箱へ衝重の遺製多々一衝重比制うつて縁高とす。縁高は足と
とうて重ると重箱と云ふ。古重箱小者ねと組入松札折枝をとがむりの衝重と
者ねと組入る飾と畳をうりのと並び衝重も経てうるをかけらうはぐら松札を
うし但食籠比号へ重箱と云ふ。古制比食籠がくわら也と
衝重縁高。食籠比名と號く重箱と云ふ。尺素往來 文よ食籠と云ふ重箱
比名。句を金したちれりと右比。或書ふ重箱へ慶長年中始てつくりとつる。少
びれゆ多々既ふ文龜本比 饅頭屋節用 重箱比名目をうれじたうすやうく人能乃

二代男

狂言。菊の花を以て「時がうつとす。先盆」と極く榮めた。之にて一つたゞべしと稱す
なり。然るに後うとうとひて、いき落し。又、酒の酒樽がまことに、冷れま根より、其の間
と入くわく出くした。といふ事なり。又、鈍根草とて「狂言」の室にさへせん。
轄(じやく)も一(いつ)とよすらあり能の狂言のかうじとく前にもたびくつ如(ごとく)。そ寛永
十七(じゆうしち)元禄(げんろく)比(ひ)ての古画(こゑがわ)或(も)印(いん)本(ほん)比(ひ)て
とて重箱(じゆうばこ)之(の)松(まつ)檜(ひ)草(くさ)花(はな)などあぐくとく盛(のぞむ)り。食(く)る物(もの)がくに盛(のぞむ)る事(こと)
何(なん)と今(いま)の硯蓋(いんあわせ)もすのべと近年(ちかに)比(ひ)て造(つくり)てや十(じゆ)
重箱(じゆうばこ)も交(か)えたり。自笑(じしよう)北(ほく)草(くさ)紙(し)。

○元禄十七年印本比繪(ひゑ)は重箱(じゆうばこ)よりて硯蓋(いんあわせ)なり。卵子(らんし)酒(し)

西川祐信(よしのぶ)がけり。印本比繪(ひゑ)などと同(ひと)じく硯蓋(いんあわせ)のまわりて重箱(じゆうばこ)なり。この後
それより重箱(じゆうばこ)と盛(のぞむ)る元禄(げんろく)未(み)よすれて硯蓋(いんあわせ)と盛(のぞむ)る宝永(ほうえい)年中(ねんちゆう)
始(はじ)めり。とおりから個(こく)硯(いん)箱(ばこ)の蓋(あわせ)と葉(は)を紙(し)に成(な)り。之を古(き)代(だい)を記録(きりゆく)或(も)歌(うた)集(しゆ)とす。

山の井

慶安元年印本卷之五。新黒谷(しんくろや)比花見(ひばみ)の表(おもて)ふる余(のり)
のり。而(ひいて)は硯蓋(いんあわせ)と重箱(じゆうばこ)の如(ごとく)。

よしとてのりとまことに、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、
かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、
かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、
かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、かたまく、
硯(いん)箱(ばこ)の蓋(あわせ)と、肴(くさり)と、盤(ばん)と、始(はじ)めりて、つひふ一種(いっしゅう)の、
硯(いん)箱(ばこ)の蓋(あわせ)と、肴(くさり)と、盤(ばん)と、盛(のぞむ)る事(こと)。

硯(いん)蓋(あわせ)は式(しき)正(ただ)ふ用(もち)せる事(こと)はあくまでも、今(いま)民家(みんか)にて、正月(せいがつ)屠(と)蘇(そ)酒(しゅ)比(ひ)肴(くさり)と重箱(じゆうばこ)を盛(のぞむ)る
ハ宝永(ほうえい)以前(いぜん)古風(こふう)は残(のこ)り、なり。

三足猿

支考撰(しりょうせん)。上梓(じょうし)れ年号(ねんごう)。

按(あて)る宝永(ほうえい)比(ひ)うべー著作堂藏本(しょくたくどうざうほん)。

附(つき)合(あわ)せた。

菊(きく)比(ひ)香(こう)に、菓(が)子(ご)と、りまとど、硯(いん)蓋(あわせ)。

蘭(らん)小(こ)。

硯(いん)蓋(あわせ)ふ菓(が)子(ご)と盛(のぞむ)る。近(ちか)いが、今(いま)も

本朝諸士百家記(ほんじょうしょし)。

宝永(ほうえい)年印本卷之五。

詠(よみ)ひてれ、食(く)る、硯(いん)蓋(あわせ)、み、于(お)、菓(が)子(ご)、と、づ、た、く、り、て、詠(よみ)の、一(いつ)、物(もの)、と、や、す、み、り、ひ、く、と、く、

み、り、く、く、り、り、硯(いん)蓋(あわせ)、お、千(せん)、ボ、子(ご)、と、盛(のぞむ)、る、(菓(が)子(ご)と、盛(のぞむ)、る、)、か、と、り、や、ち、ま、れ、か、く、ま、れ、

者(もの)と、盛(のぞむ)、一(いつ)、種(しゆ)、比(ひ)、墨(すみ)、か、り、と、宝(ほう)、永(えい)、以(い)、前(ぜん)、古(こ)、風(ふう)、は、残(のこ)、り、な、り、

硯蓋と称す原とすの事

○二足三文十四

今物比價の安う。二足三文より諸へ元金剛比價より出う。乃物語
刻梓の年号よりも見えず。下之卷より人二そく三文もりのと云ふ。本
眉とさうひど院あり。杏花園番本。狂歌と載す。金剛ハ草履ぬるなり。菌金剛藁金剛板金剛種あり。

○三線鼓弓れ古製十五

松比葉 元禄十
六年板み。永禄の比琉球より地皮二絃比樂器と復て泉州塙の琵琶法師
中一小路より者一絃とまで三絃ふぞと世ふ。みんと呼寛永よりやまと盛
がくかく小路より者一絃とまで三絃ふぞと世ふ。みんと呼寛永よりやまと盛
つづてまづれ六十余年かれを古製と存ト。今と大異べづれの比琉球は
名近歩く。今のかげふぞとまで。○鼓弓れ古製も左よ出を承月をぐ
○元禄の比琉球より三線へ何う。今のかげふぞとまで。元琵琶は
きぬやまふ。機械より金と題す。元琵琶は

寛永正保れ比乃古画から三線の
古製とくふべ

美少年の男子の体也



海老尾の形琵琶ふ
似たり今と大異く

万治の比も
このとくに

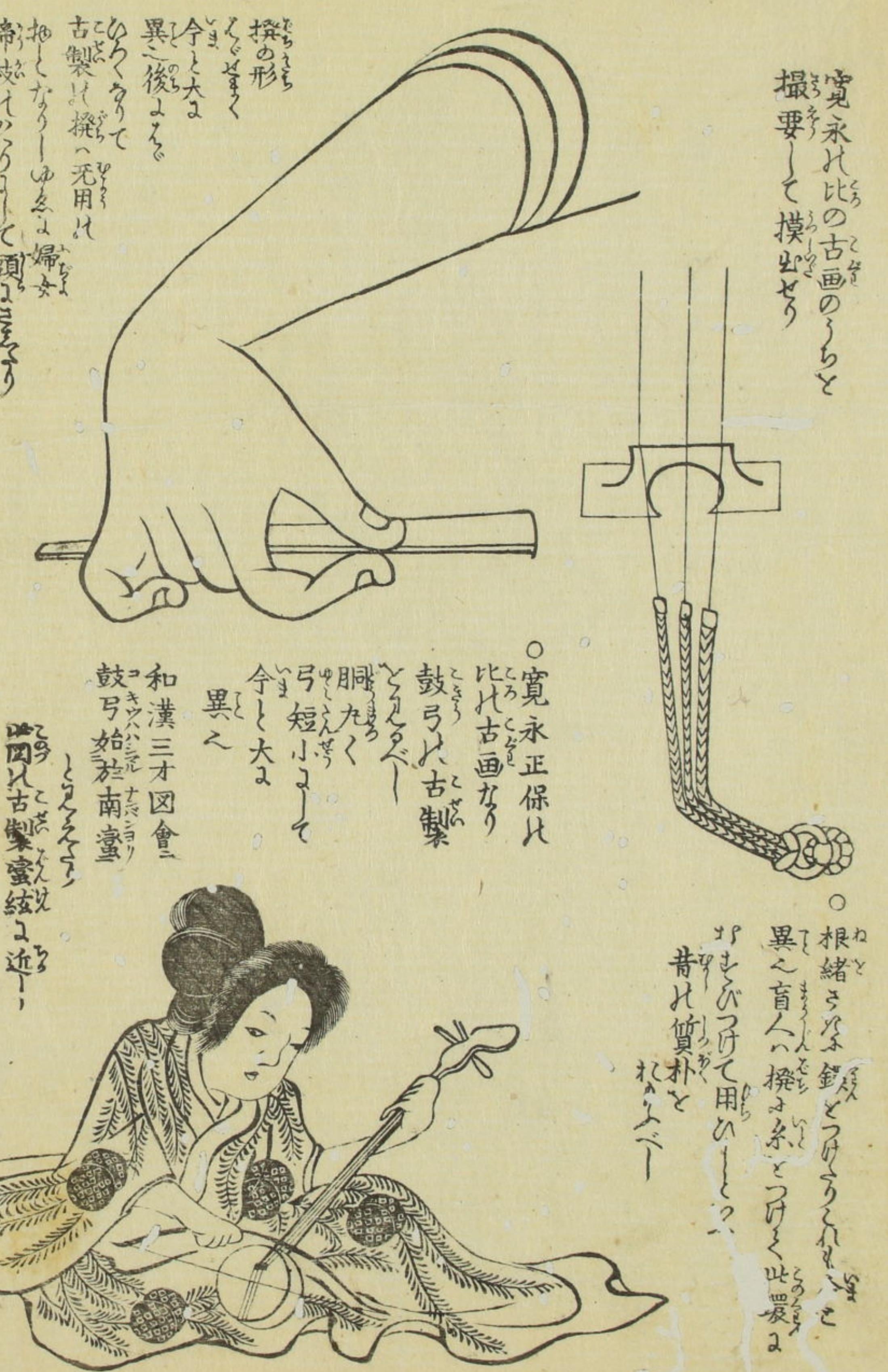


万治年月印本
東海道名所記
所載

京山模寫

富四

寛永比の古画のうちと
撮要して摸出せり



今と大々
異へ後より
古製は模へ无用は
物となりて婦女
掃枝れからして頭よきす
とく説ゆるを前より

○紫革足袋

十六

和名鈔 今按 野人以鹿皮為半靴名曰多鼻。宜用此單皮二字乎。トも足袋ハ革ヲ制するが元なり。昔應仁前ハ貴賤男女すべて革足袋と用ひた。文祿乃比古画と見ゆるに小柄の紋有る革足袋と多く有る男子より紫革乃足袋也。女子より

室町殿日記 十之卷。長一の奥方用ひてゐことゆこせー註文乃より

「一 もうとさだびひもへやつられなるうち事付ひく 十足」としておこられ天文の

比へ當時ハルきくれ婦人も紫革の足袋とておこられ天文の

獨語

サ云「我をつまむ者

中ニ慶長元和の比生くるりの男少も女少も見て寛永也あらと年比盛とて往く
とくふえ男ハ冬革のうちかけ革は袴と美服と女ハ紫の革乃襪子としくをも
けくかくめりくろそもの襪子ハ我とて少い時比天和のまでもののりて何事かう云ふ」とある。
又志之双紙 慶安二上之卷 紫比物乃のみへどつたる事ユ童一人あらうだ紫麻子乃
小袖きくくと紫比く一帯紫たゞふくらひう云ふこれを寛永慶安也あらへ

紫足袋とりく用ひたりとるる

都風俗鑑

延宝九年板巻之二云「足袋ハ白革」と

またびとくくのくらし氣のとくいの間方へ云くあり物語

一名女五經

延宝九年板巻之二云「

白からはもととへもと」とあるを延宝比よりうてハ紫足袋やくともとれる

からん○貞享三年比印本よ老女比事とくとく象に「苧桶ヒソムロ」の織紅

付一紫れ革たび一足つきの珠数袋云々

西鶴織留

正徳二年印本 貞享の比の著述、卷之一。ある老女

のきが若き時に手と譲る象々「我等も娘へ花色深乃りんきる。地は油の革。一筋

そ姿と作とあり振葉の時も淡黄よりし菊の絹比ねあらんの革。紫比革足袋

と花とやり一比云く」と有りとす貞享の比よりうてハ紫足袋とくものやうかし。からん

我衣よ足袋の事とくとく象々「寛文の比まで女ハ紫革かどくそくらん荷長一白革

淡黄革もむり細ハあらかゆをあらさんと云ひ一足を一年も二年も三四年を用ひ

う天和の比より木綿比畔きの足袋とす云く」今彼是と参考をすれ紫足袋ハ天文の

比より寛永慶安比までおもとからまく延宝天和の比よとくふくらむと翁草卷之

五ふ昔ハ男女とくよ革足袋と用ひ明暦比後革の價すくゆて木綿足袋と用ひ」と

いすもれども翁草寛永九年印本富る老比事とくとく象々「う葉さすれ木綿たびを

ぐ頭巾で顔かく一云く」とあれを寛永比比も木綿足袋あたふくらむ。

○たばくの文様

十七

慶安より万治寛文比比女の衣服よ丸尽一比文様おもとからます

山の井 慶安元年刻

秋乃野比井一葉比露やたばく

嵐山集 慶安四年撰明暦二年刻

花くようる日新やたばく 安明

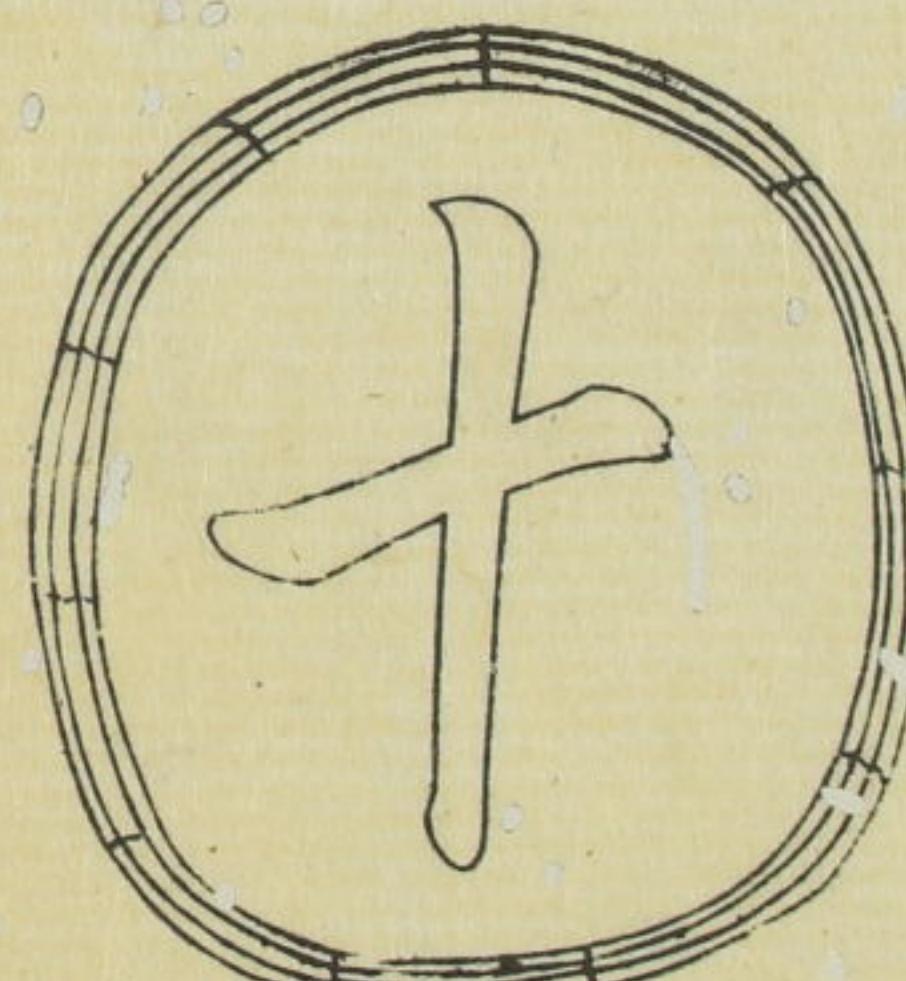
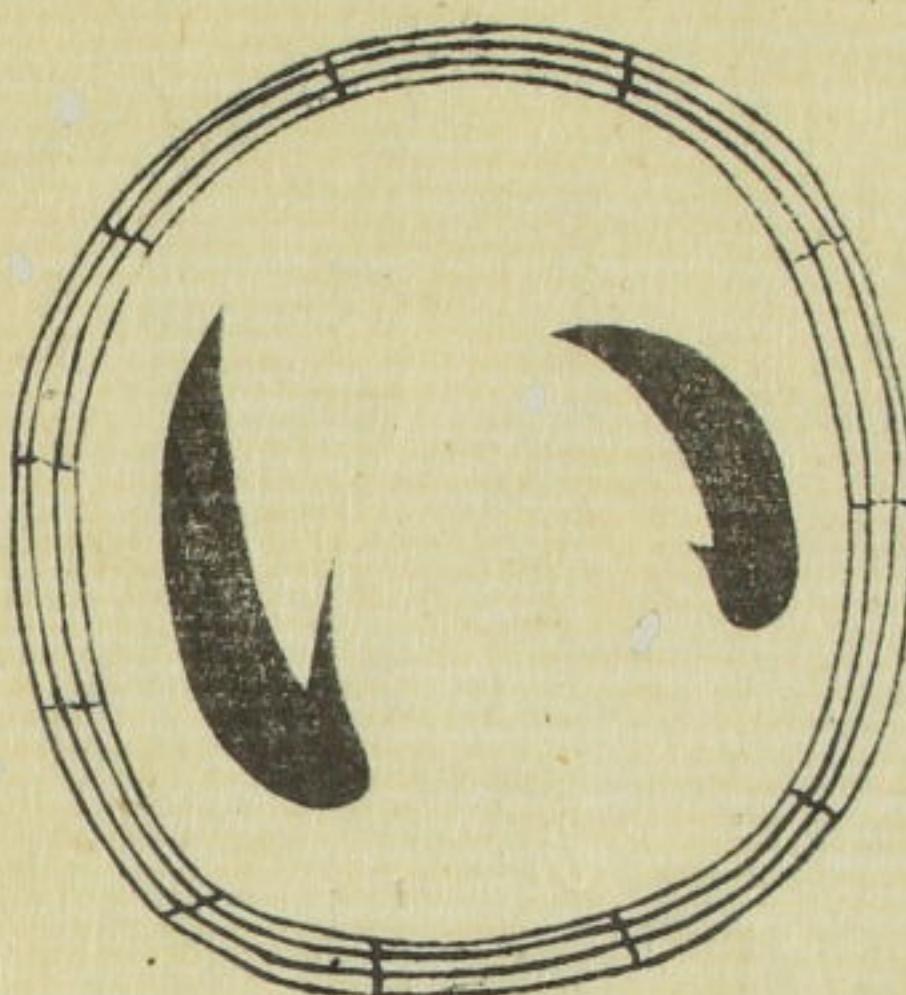
新續大鏡波集

新うつす田あ比目や丸尽一

品芝

万治寛文の元と盛り経る江戸三浦屋は名妓廉雲を主にし後其勢かくぐる小袖と卓圍
みづきく出生比地信州筑前宿代或寺々寄附一とるが今すあらま。或人其文様を二ツ
臨して予よ何とぞ左よりは是又万治寛文比九べしの文様北朝あらわる

一譲之



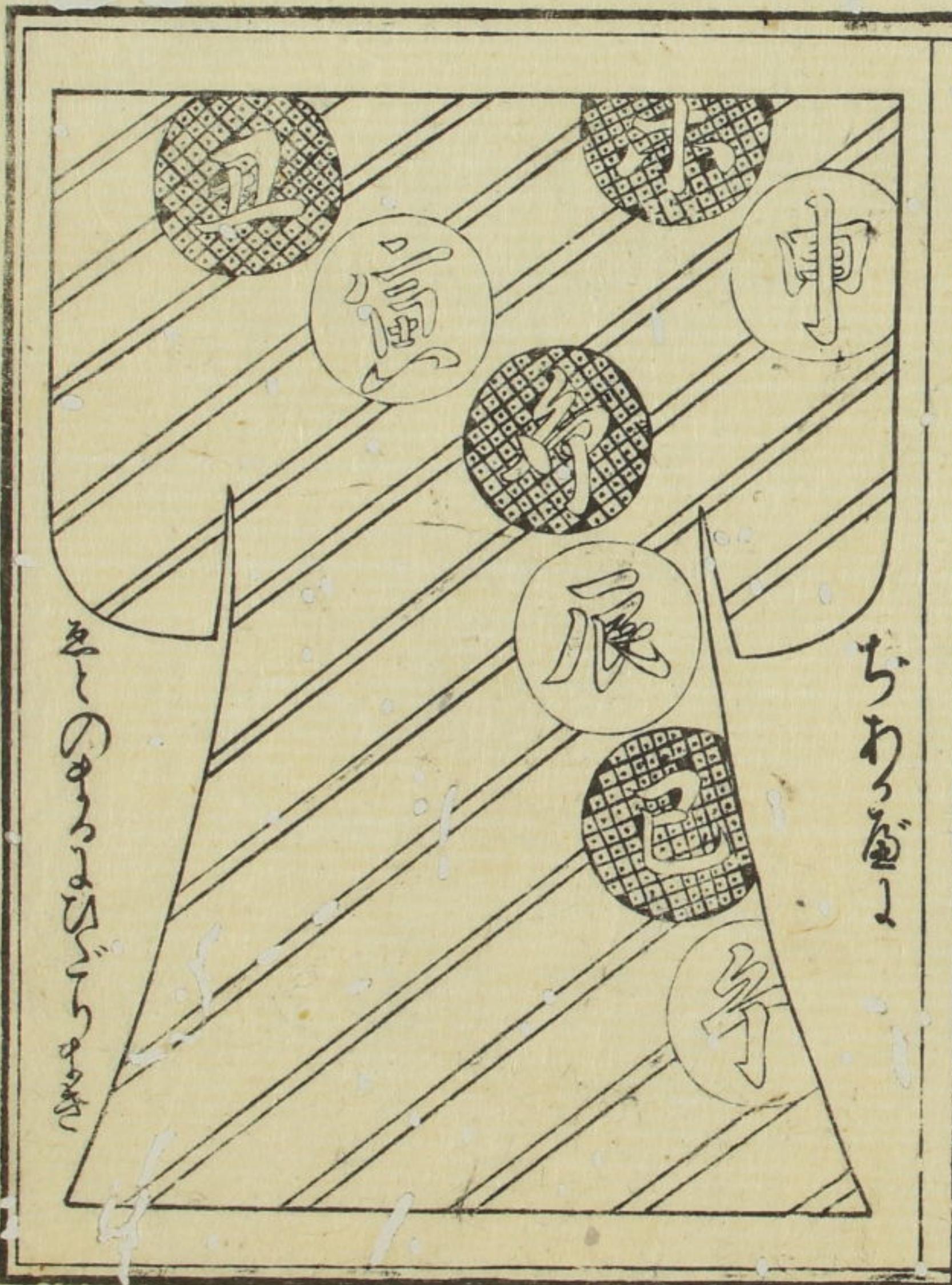
地紺縫子。紋紗變形。織文様丸は四十八文字并み一二三九。數字を
り。丸の外へ白く捺り。文字は黒紫。萌黄等色糸とぞなり。丸の内はのやう
金糸とぞなり。丸は大小異同ありとぞ。

丸尽文様雛形二種

寛文六年

印本
新撰雛形
所載

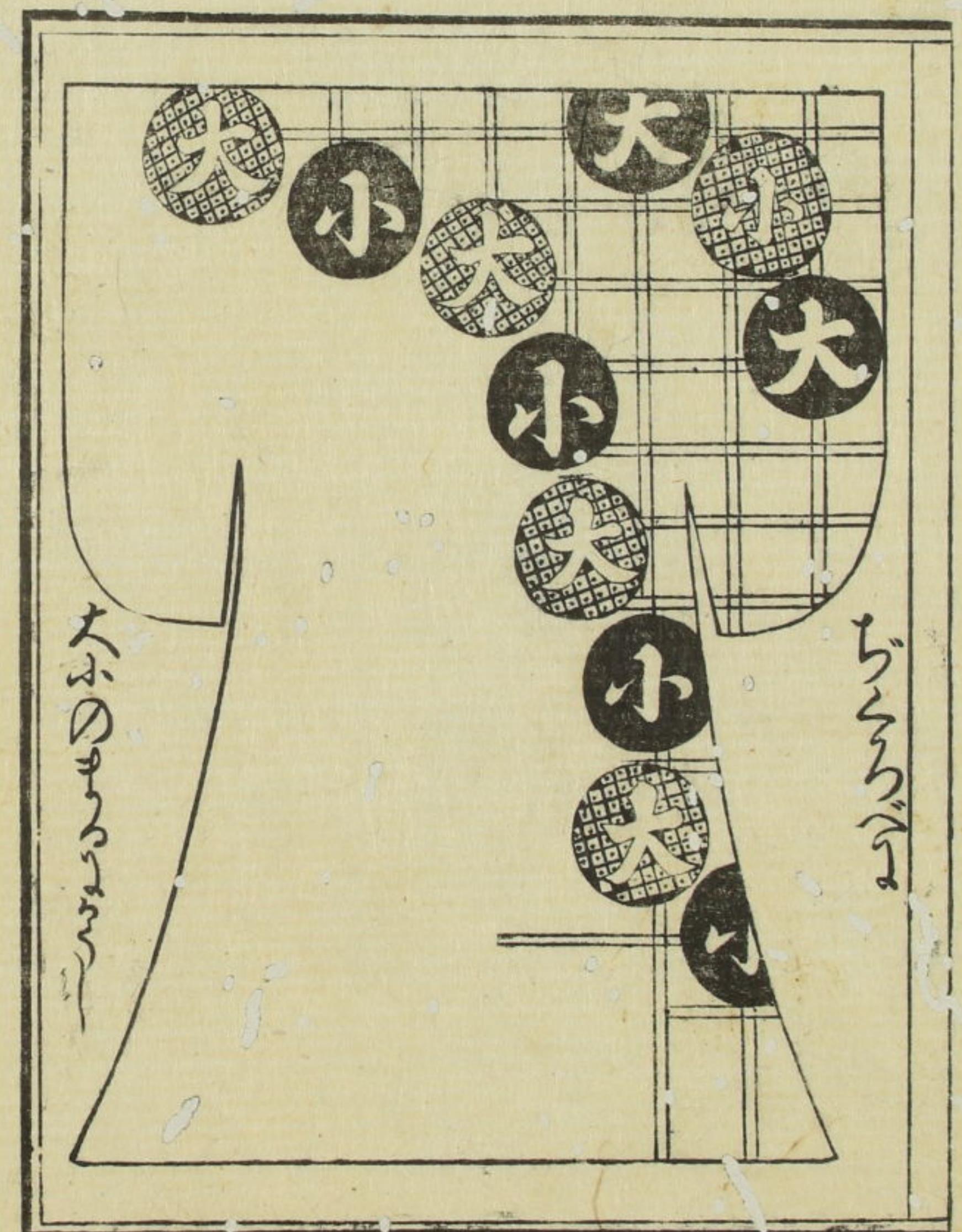
瓢水子浅井
了意ノ序



同書所載

右に卓圍と此離形と
符合するとしてその型
の流行をもす

○天和貞享比の印本
女重宝記とその物の
一の巻又「友禪」流れ
丸はくー云々とある
これも一證ともいへば



題目踊図時繪香合

十八

絶て沃掛地ニ蓋け画
此等繪より大き
図比如一



接るに是寛永時仕比古義かう治北修学
寺村或ハ松崎等に題ト踊の名かく
廊々舞うたちの丹前革一のり之

枝の葉

元禄十一年板卷之一三絃鳥組比歌
京でと一茶樹屋が娘四ツ割革とたゞ手
かけくいふも腰ヶちかやうか一のり之
則是をぐ一これへしてソシ三絃比本手
組とすもの作り出せ時比歌うれし
寛永時代からとまつり少女ひよひよと
くれ聲とじよひよひよとまづる体も
かくすりかく寛永元年より今文化十年
かくすりかく百九十五年かくすり

山東庵所藏

イニ 文字語トアリ
ホ可考

十九

○祖父祖母之物語

異制庭訓 遊戯之事と云ふ。振聾・石子・礫打・竹馬馳・編木摺・文字結
文字書・書白・何曾・宿世結・宿世焼・祖父祖母之物語・目比・手引・膝挿・指引
腕推・指扒

和名鈔

ふ

又西行の歌「石かくは出乃處あらやどなむてまきゆりへがりやん」とある。
これ今云手取之。文字結・花結・たぐひ歌・書白・歌占のたぐひ歌・宿世結・今云
縊結かべ。祖父祖母之物語・今蠶れびむれむ・かりゆすの思ひべ。
目比・今云かくもくべ・長門本平家物語・ふとくみねじあたしより。前ふもりよ如く
異制庭訓・元亨秋書の作者虎闘和尚の作・そ庭訓往来・前は書かれて其
来る・こと尚し・かくべ・かのふらば・畫遊れ原とろぬと古事記へこちやう
かやく考へて追書ちべー。

○辨疑書目録

ふ。異制庭訓・玄惠法印作。元遊學往來と同本こととく誤る。

元禄五年板の書籍目録

ふ。虎闘作・正一と會。其故へ、遊學往來・玄惠

此作・寛文二年印本とし。其文異制庭訓と異かまざなり。或人云異制庭訓
といふ。本名みへゆうざ。玄惠法印作。後此名かくい矣。

志れども。本名つづりふれむ。志る稱べー。よ。

○源平盛衰記

卷之二十四鼓判官石四口と揃て一二と突とてとくと不す。石子れぞひ

かべー 小大君家集 俊頼朝臣

散木集

等ふ。石をしづの歌もくもくと。

童遊の考へれのくふをど。別録とくもくと爲む。くふりう一つ。

○持游無本

三十

遊學往來

少性を捨。聾放。礫木摺。礫曉。獨樂近。拍毬。砾子。持游無本一。

小石・竹子・茶籠・小車等。接觸為也。法景延形。無終出。能者。字義ふくらむ解
う。せ。持游無本。持へ俗化弄乃字こそ。りそらふと。訓字をも。字義ふくらむ解
う。今按る。伊勢の御神事。もくらうらと。本物。手と。死にて。謳歌も。

多と申ん。此名目童撻アハクふう。主張たるてうちて戯と。持達と云ひ。一無木と
ツバ。轟壤カタマリ木本立タチ。東海道ヒカリもぎ。とくべ。東國ヒカリもつま。とくべ。もと。やうじと音相通アハクり。
つとそでつとくよき。むきとくひ。もどとくひ。うきとくひ。むと。やうじと音相通アハクり。

口ウチにごとく形のちひき木と地ヒタチ立タチ。かが、形比木とわく打つ。戯アハクり。
是唐土カタマリ木も幹シル立タチ。三才國會ミツノクエイ云モテテ以モテテ木鳥ヒタチ壞スル。前ヒカル廣ヒカル後ヒカル鏡ヒカル長ヒカル一尺
四寸。闊ヒカル三寸。其形如履カタマリ。臍ヒラハラ節セツ少ヒナ童トド以モテテ為スル戯アハク。將マサニ一壞スル。先ヒカル側ヒカル一壞スル於スル地ヒタチ。遙
於スル三十步モニ以モテテ手中ハンド壞スル。撻タケテ之ヒメニ。腰モコ者スル為スル上ヒカル。又星干ヒカル此方東國ヒカルそ。やさ。とよ
戯アハクこれみゆう。和漢カタマリ 戲カタマリ之ヒメニ 和漢カタマリ三才國會ミツノクエイ 擊壞スル。びとくらと假字ハナシとつけす。

遊学往來ハシマリの無木ムカヒは是カタマリ。

○打出小槌 猿蟹合戰

異制庭訓

み祖父祖母之物語カタマリ

とどくて名目カタマリあつたものかづきを。童トド此昔カタマリからへいとゆくとある。ものれ二十

四五年前童話アハクに出カタマリとづいてゆきとくらするも。童話考カタマリと名づけと一冊カタマリ

いと考カタマリ足カタマリふりき。年カタマリくくひらせぬひさて隱カタマリ蓑カタマリ。古歌カタマリも何カタマリ
うされども打出カタマリの小槌カタマリの木と木カタマリもれとく。それども

女御カタマリの段カタマリ

盛衰記 卷之九六

小槌カタマリの事カタマリ是カタマリと同説カタマリ

平家物語

祇園

べし。かく

卷之九六カタマリ打出カタマリ

傳カタマリ多カタマリ。又康賴

の室物集

卷之一カタマリ人カタマリ比室カタマリ。打出カタマリの小槌カタマリ。人物カタマリ能室カタマリ。寄カタマリて多カタマリ。

廣野カタマリふゆく。居カタマリる人カタマリ家や。面白カタマリ人カタマリ妻男カタマリ。遣能カタマリ人カタマリ從去馬牛食カタマリ物衣カタマリ物
多く。心カタマリ任カタマリて打出カタマリ。くわくらそ。中畠能侍カタマリ。又人傍カタマリ。指カタマリ。云
様カタマリ。打出カタマリ小槌カタマリ。目カタマリ度室カタマリそ有カタマリ。口惜カタマリ。手カタマリ打出カタマリ。樂カタマリて居カタマリ。身カタマリ程カタマリ。鐘カタマリ聲カタマリ。とくに聞カタマリつれカタマリ打出カタマリ。袖カタマリこもく。と告カタマリ本カタマリ。けり。されど
目カタマリ出カタマリて居カタマリ。思カタマリへども。左様カタマリの時カタマリ。廣野カタマリ中カタマリ。只独カタマリ。居カタマリ人カタマリ多カタマリ。
波鳴カタマリ。中畠。昔カタマリ。隠蓑カタマリの少將カタマリと申カタマリと相語カタマリ。有增數カタマリ。父佑カタマリて

承。是則。

酉陽雜俎續集

の。青色得金椎子と。和漢相似。

仏与天受ノ四字語ヲ十サズ追テ根本難事但可考。授ハ提婆多見ニ。義楚六帖

四十云。根本雜事ニ云。有隱人

在果樹下坐。被猿猴擲螺破額。忍之不報。後有蠻俗與仙人為友。來

在樹下坐。如前。獵者怒射之致死。佛與天帝。慨然之。按。猿蟹

合戰の話。童話の原と云はる。按。猿蟹合戰の話。此果樹と根と枝葉とくらべて。枝葉とくらべて。其理と分解する。且女勸懲。一時も経ず。もやもや。或は漢土に故事ともづく。或は漢土に故

五百年前の書されば。祖父祖母の童話。かくとぞありふべ。五百年前に童話唯す。而今あつたのを見て。今ふ殊より不思議と云ふべ。かく愚考られども。他日童話影と刻もぐき志ゆれども。あつたり。

散木集

ふとまき馬見牛持。

承源法師

○ちまき馬 きうり牛

三十三

附
「ちまき馬のくじかどさうる」

「まうり乃牛ひまくちうり」

「まうり連歌。今接ふ。ちまき馬へ茶そ。造りくる馬。まうり牛へ胡丸そ。造りくる牛へ。こへらまき馬と千牧比馬みかう。胡丸牛と木賣比牛みかう。秀ひ。今世聖靈會。蔬或へ瓜。於子そ。牛馬と造りて手向ひ。是生れかどりよや。かく。散木集ハ俊頼朝臣比集。俊頼朝臣。鳥羽院の御宇。天仁の比の人。かく。文化元年より今六年より。或へおり。今信濃常陸下総かどれ國。くまで。藏みくちひ。馬をつくして。七夕ふ手向ひ。かく。かの草巻比馬。胡丸の牛へえ。七夕ふ手向ひ。のやう。牛へ殊々七夕ふ縁酒をす。もあ。七月あれど。それからて。靈棚か手向ひ。奉め。かく。放。或へ正並相。よ

手向らざ前ゆく。七夕み手向らざ後も。とまんがくまれ古き事なり。

○奈良の庭窓

世間胸算用

元禄五年印本 卷之四云。正月奈良中の家々に庭窓あり。釜にて焼火にて。

度々敷物してその家用と下人もむろみ樂居して。不珍の事也。是く而乃
ゆりとて病み入る丸餅とを火盆を焼喰もいやうべ。あく
昔の庭窓は考へれりべし。これ前ふつて地火炉の遺風かべ。

○元禄二年冬

諸君の御おのぎてうなばの隣鄰のうりと今もか

廬慮ふて縁より民や庭窓

芭蕉

五元集拾遺

庭窓牛乳雜煮と居り

其角

頃の久も何とぞ。庭窓へ素直のふりうべ。蓋奈良の其原より仰ぐ
○江戸吉原ふとも正月庭比焼火とよ奉り。これふとも附會の説とソトモ。實に
庭窓比遺風かべ。昔わくかへ一様とはふる奈良の庭窓乃ちとひふくらむ。元吉原の

比より傳へるを知りゆべ。今へて燒火をものと

○長崎桂餅并車木

三四

世間胸算用

卷之四。長崎の年比幕の奉りとて余ふ「餅へ其家々の嘉例みま

せくつまむ。桂木もとそは年一とと大しく桂木うちつけて。正月十五日比左義
長のことをとて祝ひ。桂木幸ひ木とて横よし。あちく。餅のまこと串一具
居。鬼舞子。あめの爐網赤い。昆布鰯。牛蒡。太根。三ヶ日みつよをどう料理
カ。此木みつよじて。桂木とをどり。とて大晦日比夜ふ入れを。ゆりひども與りく
あく。とてつう一多びと大しく。又。菟邊甚ふの。當年比之方比海より湖がまつ。
家々とてひまわりうぶ。おつき。一ヒ。おゆゑぞ。【】とてえどり。これ元禄年中
半。長崎比ノ問。此桂餅比遺風。今より。餅と延命袋の形ふつくりて。大黒
柱みおひけて。墨春ふつうて。おのづ。落も然まらて。おぢくらふとぞ。

○宗祇の蚊帳

二十五

今俗ふとえどくよしよし。虚言して自誇すと。百七八十年前の謡よ宗祇の蚊帳もひりる。宗祇法師しおかト蚊帳ふ麻うらと虚言して誇へる。世は隠よ

嵐山集

蒙安四年撰明暦二年刻

三井がそ面白紹一の陽城をとすとまくとあり。

おゆド蚊帳かわふねへ則りふ義哉 貞徳

色に奈れ清氣重く余談もと家族の事と
ソアカルモト故事用ひシ

以上右の集ふとえどくよしよし。元禄の書もいひ傳ふや

西鶴あらうの友

元禄十二年刻

「かの時旅宿ふく。山家

のひととて。今宵ハ七月七日星もあつた。天の川。かのじの月を打て。まくらふ
鳥口著とろくよて天上と星乃まつる年ぞと云。細浮れど。いつまでも紙打て。まくらふ
すれぬ人。ハ公家の事。するをも。我へいすれられど。と連歌附。宗祇法師諸國を
修行し終ふ時。人比縁の毛小ぬりのなり。東海道岡部の宿を相宿。岡ト牧屋みかげ
すれぬ。前より。昔宗祇法師とよくたまつて。これぞ。如也。如也。如也。如也。如也。
と。昔物語。し。云。」

骨董集上編中之卷終

嫁迎記

嫁

夜

袖 草

火燒并地火炉再考追加

すうあるやうて。うろくぬりて。がよねうどあるうのよそく

とある。うれい。東山廬の事。をかりる。ち記

されば。當時も。うろくぬりて。がよねうどあるうのよそく

とある。うれい。東山廬の事。をかりる。ち記

決ぐ。唐も。うろくぬり。脚。火。足。をあく。め。東山廬のうろく。以前あるべ。前。又。墓。

り。うろく。窓のき。うろく。ふあき。繪。巻。の。圓。も。宗長手記

下 大永六年十月の條

又同七十二月の條

火

火燒并地火炉

再考追加

○さて右の書す「炉火あらう。火鍋」とあるを考る。當時。こうらといふ。今。こうらや。がら

の事と。き。今。炉火をこうらと云へり。よなご。嫁迎記よこらのやうあり。とある。

今の言ふてのうへ。うちやぐらのやううめとくの義うくん。やうへの通例のところへ。今のうへひくやくへうべ。實永のころ別よ高とたうとりてゐるゆえ。今ごたうちうあるべき。からまうと云名をかひへとと前よじるがどくきん。今も信別のところへ。それをえつてもうつ先をうめひぐをこだくへ火氣をりくと。ナヘ通例うりひくまう。それぞ古體ゆゑうあるべき。機をつくろへ後うつん。

印本今昔物語 卷忠明云々の條よ「忠明いつ。火燒乃灰をかわく取集め。」
とあれど**日本** 云々火燒の字す。印本かわく後のまへらむ。印本の三をえて。

こたつの名へあく。とみありひまづひそ。

○前の火燒の考の因よ地火爐の事とひる。引ひもちとくよ舉。

續古事談

卷一

寺院の御時。臺盤所とて。地火爐ほのどと云事あり。云に一

榮花物語 玉のうとうの卷よ「厨子所の御と云ふれば。云々又たりとあけたる
やうへづのほきく。あたみ六人。ちひろのりとにおあきて。がりのとひそめに
新撰字鏡 = 嘘の字の訓。火呑とあれば。ちひそへ地火爐といふが如し。既にかに近見
世の庭竈へ地火爐ついでの遺風す。ベ。唐土の爐火會すも似たる。

○地火爐の事以外もあれり。これぞあつたまことにあたるぞ。がまうる。

骨董上編 中巻追加

○右が引る。中古近古の書ども。假字のところえぬもかやうれど。そな
まにあつて。ほひく意をりちひど。古書のまくとを失ふよ
ちひのうれびうり。又字音ひかのれびとる言ふも假字のたゞふど
かわせらる。いよせん。他よあつて。あせつれば。これをあしたずりにり
ゆくべ。又字をあきらめよもあやひば。○是等のかもひきあわててよ
べたことあら。凡例よりがらされど。ひまく板よ雕きのつと。書賈。前件
卷をとくちよ弘くんとそりまくと。きぬれば。かむとくを得ど。後件の
卷首よ載べくあり。アシヒ人。次の正一。かうざるを。まづがりと。

○後件目録

下之卷前

- (一) 楚杖考。打楚樂圖・古製
(二) 猛杖考。今制楚樂圖・楚杖圖
(四) 粥杖考。北越の祝木の圖
(五) お乳母日傘とくへ説の原

- 六 ひの名義ひのみの假字 七 離遊のもと八 離社 離合
 九 漢文物語の離托十 古書ども小ええー離托
 十 ひいみの調度十一 ひいみ衣 粟島の神
 十一 室町家の比の離圖十二 伊勢の小朱離
 十二 離遊三月三日小ええきり一考十七 唐の時三月三日鏤人あじ事
 十三 ひみの繪櫃 古圖をくわべあらじ
 十四 離の使圖 菊川が
 十五 姫夙の離圖 十六 ひいが草
 十七 享保の比の土離圖 元 享保の比の土離圖
 十八 後離の考 上已のひみの考の条よりはびの主意に質素を以ゆく
 十九 享保の比の土離圖 美巧を好む事とぞとことことと童よきを

下之卷 後

あれれ遠らくひりまの假字を用ゆれども比比奈の假字も

古名脣みんゆればりのみとすとよどじゆくわくをうへ

後帙の卷ふりをも

- 一 子日の離遊二 賞物のひいみ
 三 舊進北丘尼の繪解 四 屏風の古画
 五 端午の茅巻馬
 六 端午の頭巾竹篠扇 小人形
 七 端午のわざ花
 八 ちうきの念佛の古圖
 九 後妻打考 同古圖
 十 比比丘女 童子の原
 十一 酸漿を吹くと車今よりかこそ八百キメリ
 十二 小児をかどせよわとりふくろの考
 十三 わくれねび 白地藏・今えか
 十四 手鞠考
 十五 たみづこの牛馬
 十六 上古中古近古の女の髪の風
 十七 中古近古の編笠の考
 十八 ひんだの踊・掛踊・伊勢踊
 十九 榄久塚牛おろー坂
 二十 あ国哥舞妓の古圖并考
 二十一 いーみじーいーみじー

- 前年ありし證
 一 紺屋の白袴再考
 二 竹馬再考
 三 劍進聖判職人哥合
 四 手鞠考
 五 たみづこの牛馬
 六 端午の頭巾竹篠扇
 七 端午のわざ花
 八 ちうきの念佛の古圖
 九 後妻打考 同古圖
 十 比比丘女 童子の原
 十一 酸漿を吹くと車今よりかこそ八百キメリ
 十二 小児をかどせよわとりふくろの考
 十三 わくれねび 白地藏・今えか
 十四 手鞠考
 十五 たみづこの牛馬
 十六 上古中古近古の女の髪の風
 十七 中古近古の編笠の考
 十八 ひんだの踊・掛踊・伊勢踊
 十九 榄久塚牛おろー坂
 二十 あ国哥舞妓の古圖并考
 二十一 いーみじーいーみじー

前快ニテの争くよ考へのたぐらゆりたらがるあり引ひ
 せるを後ふたのでたるもあれば再考をもぐわざと後帙の
 卷のをりに附る標目左のと

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

前年日記

菖蒲再考

園太曇

魚と
毛詩
の注文
夫本抄
ふ考る

菖蒲再考

- 前帙二卷の引呂が古くからうきた草紙繪物語のたゞひあれど近古物より多くてのうちすむまことに本手本手と云はれど、當時を考るたつたるもあらど、さうわれ識者の看小あづべたのあづねが、その呂月を挙ぐ。○後帙二卷へりから古呂を引つれど、とかくうれば、これのとゞく呂月を挙ぐ。

以上後帙二冊來て亥春發行

○前帙二卷の引呂が古くからうきた草紙繪物語のたゞひあれど近古物より多くてのうちすむまことに本手本手と云はれど、當時を考るたつたるもあらど、さうわれ識者の看小あづべたのあづねが、その呂月を挙ぐ。○後帙二卷へりから古呂を引つれど、とかくうれば、これのとゞく呂月を挙ぐ。

小りのうりへど。づくに越杖がまく。粥杖離遊考の引書を左より舉て。
前帙二巻と趣の異あるをあくじ。但書籍の年序よからず。引
用す。次又あらざりあるせり。

▲越杖離遊考の考引書

- 萬葉集
- 續日本後紀
- 和名鈔
- 源平盛衰記
- 遼史
- 袖中抄
- 平家物語
- 遊學社來
- 日本歲時記
- 下學集
- 訓蒙圖彙
- 世諺問答
- 和漢三才圖會
- 鑒囊錄
- 本草啓蒙
- 三才圖會
- 增鏡
- 下紐
- 日次紀事
- 日本風土記
- 年中故事要言
- 和訓纂
- 契冲雜記
- 玉かたま
- 和名鈔
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- 古事記傳
- 厚顏抄
- 源氏物語
- 中華集
- 絛衣
- 増鏡
- 清少納言草紙
- 濱松中納言物語
- 紫式部日記

▲粥杖離遊考の考引書

- 弁内侍日記
- 日本歲時記
- 婦人養草
- 簾中舊記以上二種

▲雞遊考引書

- 清少納言草紙
- 和訓纂
- 日本紀
- 釋日本紀
- 齊宮女御集
- 古事記傳
- 厚顏抄
- 源氏物語
- 中華集
- 絛衣
- 増鏡

- あけろへの日記
 ○離遊記
 ○古事記
 ○益塗鈔
 ○拾芥抄
 ○世諺問答
 ○無言抄
 ○御幸
 ○増山の井
 ○加茂保憲女集
 ○国朝佳節錄
 ○名物六帖
 ○雍州府志
 ○鋸屑
 ○其袋
 ○土左日記
 ○日本歲時記
 ○諸國奇遊談
 ○昔ニ物語
 ○滑稽雜談
 ○五元集拾遺
 ○和漢三才圖會
 ○婦人養草
 ○丹波守為忠家百首
 ○年中風俗考
 ○女用花鳥文章
 ○江家次第
 ○日本紀通證
 ○朱むらさき
 ○續猿蓑
 ○女用訓蒙圖彙
 ○本朝食鑑
 ○異本和泉式部集
 ○上卷 嶋岡長盈
 ○中卷 橋本徳瓶
 ○下卷 鈴木榮次郎
 ○刷入
 ○骨董集上編 後帙二冊
 ○同 中編 二帙四冊
 ○同 下編 二帙四冊
 ○骨董集上編 後帙二冊
 来乙亥春發行
 ○同 中編 二帙四冊
 ○同 下編 二帙四冊
 追ニ出板
 加減朱子讀書丸
 一包
 一包五分
 生れつき多く多病の人用にて
 老若男女よめぎくを多よきを
 つるぎどく心をつくへんかのびくら病を生じて天寿をとどみゆく
 江戸京橋南山東老店
 べく、旅行などして益多し。
 石の碑・幸運・一粒子を即興あり
 玉石銅印古体近体りくらよ底ど・ろく石上刻一字
 一枚次刻一字朱文七分白文五分大印ひば門とあくど
 印章篆刻
 京山人百樹

醒醒老人著

京傳

山東庵主人著

雜劇考

前編二冊
後編二冊

古代の雜劇を考へる
古画古圖を載り
近刻

文化十一年甲戌冬十二月發行

天保七丙申年季春吉旦求版

小傳馬町三丁目

東都書肆文溪堂

丁子屋平兵衛梓

和漢印章考

京山岩瀬百樹著

全六冊近刻



